

第62回理工学部学術講演会開催にあたって

第62回理工学部学術講演会が、平成30年12月5日、理工学部駿河台キャンパスの1号館を会場として開催されます。今年も例年通り、600件を超える講演が予定されています。口頭発表318件、ポスター発表280件に加えて、学術賞受賞者による記念講演、理工学部の助成による研究プロジェクトの成果発表が行われます。学術賞の記念講演では、今池健先生（電子工学科）が、水晶デバイスを用いた次世代無線機器用発振器とその性能評価装置の開発およびセンサへの応用、安福悠先生（数学科）が Vojta 予想と数論的力学系の研究について、それぞれ突出した成果をお話されます。研究プロジェクトの発表では、齊藤健先生（精密機械工学科）が、ハードウェアニューラルネットワークを搭載した小型高機能ロボットの開発について、高瀬浩一先生（物理学科）が、表面プラズモンを利用した高効率光熱変換および光水素変換について、それぞれ最新の成果をお話されます。ぜひご来場ください。

本講演会は学生の発表が多く、卒業研究や大学院特別研究の中間発表、という色合いが濃くなっています。そこで、本講演会は主目的を教育に置くのか研究に置くのかという議論があります。しかし、大学における研究と教育は、不可分であり、「研究を通じた教育」こそが大学のあるべき姿です。発表する学生の皆さんも、自身が若手研究者であるとの自覚をもって、共同研究者である指導教員とともに行った研究結果を、自分が理解している内容を、自分の言葉でプレゼンしてもらいたいと思います。この場で発表された学生の皆さんは、その経験をバネにして、国内外を問わずそれぞれの分野の学会で発表し、また、指導教員とともに学術論文の執筆、投稿、掲載に向けて研究を進められることを期待します。例年同様、学部生や大学院生による優秀な口頭発表・ポスター発表については、優秀発表賞を授与し、表彰します。

研究発表の場を、専門が大きく異なる学科の集合体である理工学部として、同時に一つの場所で行うという本講演会の特徴は、隣の部屋で、大きく異なる分野の専門家あるいはその卵が、自分の専門の学会では決して聞けないような研究発表を行っていることでしょうか。時間を少し割いて、隣の会場のドアを開けてみてはどうでしょうか。違う学科のポスター発表を覗いてみてはいかがでしょう。新しい発想や共同研究の種が見つかるかもしれません。専門外の立場からの外れな質問をして、ちょっぴり恥をかくのもいい経験かもしれません。

このような研究発表の場を設けている大学あるいは学部は珍しいのではないかと思います。学部として、教職員が、予算と時間を費やして行うからには、本学術講演会を、理工学部の研究情報発信の場としてより活用したいものです。理工学部には企業と共同研究を行う教員も多く、そして、その研究の実験には学生が関わっているケースが多いと推察します。来年度からでも、身近なお知り合いの企業の方に声をかけていただいて、その機会に、自身の研究室の研究発表とともに、近い分野の他の講演のいくつかでも聴いてもらえると、内輪の集まりを脱し、よりオープンな学術講演会に向かうことができます。そのためにも、今後は教員や博士後期課程の学生の皆さんの最新の研究成果に関する発表が増え、より質の高い議論がなされることを期待しています。

最後に本学術講演会開催にあたり、実行委員会の先生方ならびに事務局の皆様方のご努力とご協力に感謝いたします。

理工学部学術講演会実行委員会委員長
大月 穰